

近代文学研究叢書

第二十一卷

昭和39年 5月30日 印刷
 昭和39年 6月10日 出版
 昭和47年 7月25日 第二刷印刷
 昭和47年 8月1日 出版

[¥ 2500]

著者	発行者	印刷者	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	小 林 寅 次 東京都世田谷区太子堂一丁目七番地	梶 原 忠 幸 東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地	154 東京都世田谷区太子堂一丁目七番地 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座 東京 一七〇・八六七 電話代表 (122) 五一三一 番

近代文学研究叢書

第二十一卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村 本保 人浜 能成 内辻 玉島 山佐 佐笹 佐坂 木河 金片 荻岡 太上 石石 池

田松 間見 勢瀬 井田 伯藤 沢々 本 齋子 桐原 田井 森田 田
坂 徳 藤村 宮 木由 俣 井保 三磯 延吉 亀
澄定 久円 頼正 幸體 梅幹 美八 五 実健 顯泉

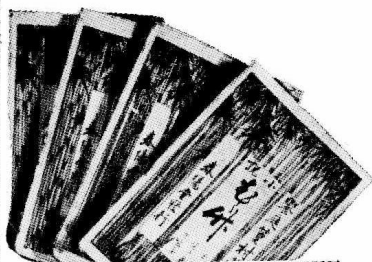
夫孝 雄都 吉郎 賢勝 濯鑑 助二 允友 二明 郎郎 修英 二智 水生 郎吉 男貞 鑑

(国語学) (近代文学) (国文学) (近代文学) (美語学) (国語学) (近代文学) (仏文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (英文学) (和歌文学) (俳文学) (近代文学) (比較文学) (英語学) (児童文学) (国文学) (国文学)

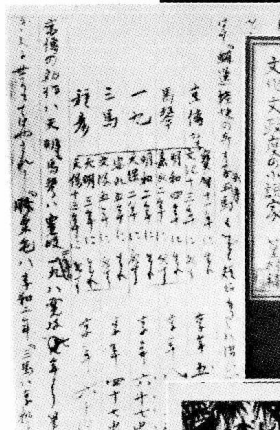
村 簗 庭 響



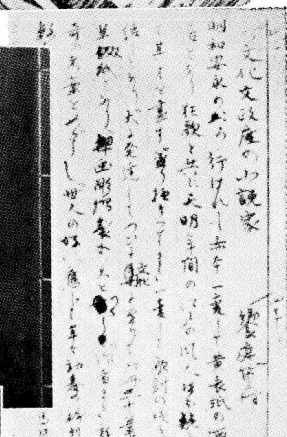
室村 肖像
右上、「小説むら竹」



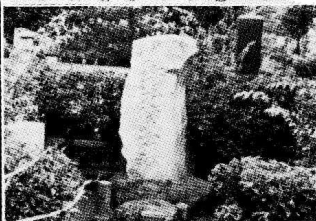
—明治二十四年刊
(昭和女子大学蔵)



文化文政度の小説家
室村 響



「竹の屋劇評集」—昭和二年十月刊
(昭和女子大学蔵)
「室村の文化文政度の小説家」草稿
(本間久雄氏蔵)



室村の墓にある室村の墓

大 口 鯛 二

鯛二の選歌掲載の雑誌
 「なでしこ」一
 明治三十八年十一月刊
 「歌」一明治三十六年一
 月刊
 「わか竹」一
 明治四十五年五月刊
 (昭和女子大学蔵)

←鯛二肖像
 (大口喬枝氏蔵)

鯛二筆蹟
 ↓ (星野ちか子氏蔵)



鯛二の発刊になる歌誌
 「ちくさのはな」一明治四十一年九月刊 (立命館大学蔵)

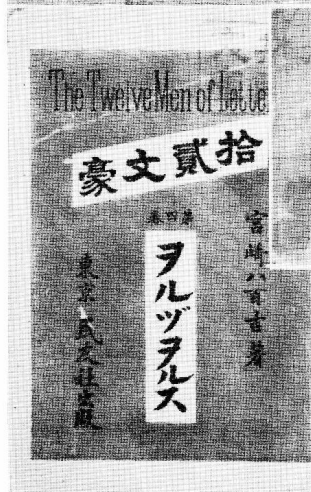
一「なな」一 号一明治三十四年一月刊
 (昭和女子大学蔵)
 ↑歌集「大口鯛二翁家集」
 一昭和二年七月刊
 (昭和女子大学蔵)

宮崎湖處子

「帰省」—明治二十三年六月刊
(昭和女子大学蔵)

「湖處子詩集」—
明治二十六年十一月刊
(昭和女子大学蔵)

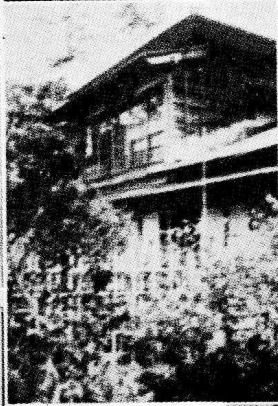
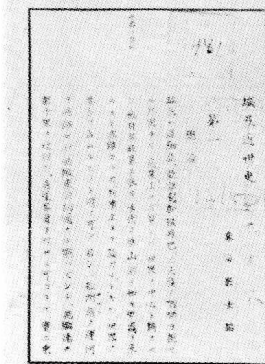
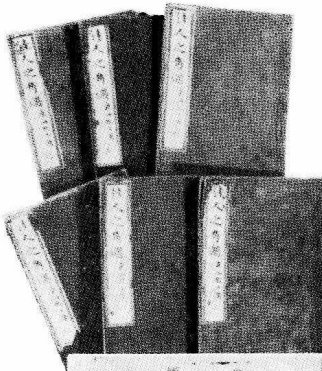
湖處子肖像



→「半生の機軸」
—明治四十一年十月刊
(昭和女子大学蔵)
↑「抒情詩」—明治三十年四月刊
(昭和女子大学蔵)
「ヲルヅヲルス」
—明治二十六年十月刊
(昭和女子大学蔵)

東 海 散 士

左上「佳人之奇遇」巻一、五（明治十八年十月刊）
散 士 肖 像
（昭和女子大学蔵）



「埃及近世史」
—明治二十二年十月刊
（早稲田大学図書館蔵）

熱海市梅園町ある東海散士旧居



熱海市水口町海蔵寺にある
散士の墓

目次

口	繪	
第二十一卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……(八)	
凡例	昭和女子大学編集室……(二三)	
饗庭篁村	近代文学研究室……(二五)	
大口鯛二	近代文学研究室……(三九)	
宮崎湖處子	近代文学研究室……(六九)	
東海散士	近代文学研究室……(三七)	
近代文芸年表	近代文学研究室……(三七)	
卷末附記	近代文学研究叢書編集室……(四七)	

第二十一卷の成立

本巻には大正九年十月から大正十一年九月までに歿した饗庭篁村、大石鯛二、宮崎湖處子、東海散士四名の研究調査を収めた。

篁村饗庭與三郎は安政二年に江戸下谷竜泉寺町の商家に生まれた。十一歳の時新材木町の質屋にあづけられその主人から芝居、俳諧、遊芸等の江戸趣味の感化をうけ、水滸伝、西遊記をはじめ和漢の雜書を手当り次第に読んだ。この少年時代が作家となる方向を決定したといつてよい。明治七年十九歳で読売新聞社に入り、高島藍泉に文才を認められ、次第に才幹を發揮して明治の其蹟と称せられるに至った。読売新聞は高田早苗を主筆に迎えてから次第に文學新聞の傾向を現わしてきたが、篁村もこの間にあつて小説に筆を染め須藤南翠と共に「明治二十年前後の二文星」と呼ばれた。二十二年朝日新聞社に轉じ、竹の屋主人の筆名で歌舞伎劇評欄を担当、理解と見識の深さを示した。二十三年四月新作十二番の第一番として「勝鬨」を発表、かねて新聞や雜誌に掲載して来た作品を集めた「むら竹」二十巻を春陽堂から出版して空前の人氣を博した。以後創作から江戸文學の研究に傾きその造詣の深さを買われて東京專門學校（今の早稲田大學）に招かれ近松を講じたこともある。しかし過度の飲酒によつて健康を害し、大正期に入つてからはさすがの健筆も鈍りがちとなつた。八

年朝日新聞社客員、十一年六月二十日大阪朝日新聞の依頼原稿を執筆中病革まつて六十七歳で逝去した。

篁村は読売新聞時代から坪内逍遙と親交があった。逍遙は篁村の該博な江戸文学の造詣と批評眼を迎え、逍遙の新知識は篁村にとって魅力ある刺激であった。彼の小説が八文字屋本風の類型を出なかったにしても新時代の風俗を文字化しようとした着眼と努力は認めらるべきである。その構想の新奇と文章の軽妙洒脱とは当時の読者を堪能させたもので根岸派の重鎮としての名をはづかしめなかった。劇評においても台本を文学作品として検討し、作中人物の性格を論ずるなど新機軸を出した。

大口鯛二は元治元年四月尾張国愛知郡押切町の商家の次男として生まれた。幼少にして父を失った彼は祖父端山の薫陶を受けて育った。端山は医家で本居大平に国学、香川景樹に和歌を学び堪能の聞えがたかい。

歌人鯛二の出発は祖父の歌仲間之感化にはじまる。後家業を廃し明治二十二年一家を率いて上京、郷土の先輩坂正臣、植松有經等の斡旋によって御歌所勤務を命ぜられた。日清戦争には大総督小松宮附きとなって渡清上奏文の起草や清書をした。三十九年十二月御歌所寄人。大正五年には明治天皇御集編纂委員の一人に任ぜられた。鯛二は海上胤平が坂正臣の和歌を非難したことに端を発して彼と激しい論争をしたがのち他流派と争うことの愚をさと、広い心と柔かく細やかな詩心を養うことを第一義とした。大正九年長野県上高井郡山田温泉に保養をかねて高崎正風歌集の下調べをしていたが脳溢血で倒れ、長野の日赤病院に入院、二ヶ月のち十月十日世を去った。鯛二の作歌は「大口鯛二翁家集」所収の千四百余首をはじめ約四万首に及び、平明穩雅に

自然を詠じた作品が大半を占め、歌壇における流派意識を否定した。

宮崎湖處子（本名八百吉）は元治元年九月二十日筑前国下座郡三奈木村の旧家に生まれた。家は秋月城主秋月種実の侍大将三奈木彌平の末流という。明治十年創設の福岡中学に入学、十七年政治家を志ざして東京専門学校（今の早稲田大学）政治科に入学、卒業後帝国大学に専科生として約半歳在籍した。文才を徳富蘇峰に認められて民友社同人に迎えられ明治二十三年二月国民新聞の創刊と同時に編集員の一人となった。二十三年に出版した「帰省」は一躍彼の文名を高からしめたものである。その清新な抒情精神と自然観は当時の青年を魅了し、田園文学の嚆矢として文壇の注目をひいた。この年新文学運動を起こすべく青年文学会を結成し「青年文」を発行した。また桂園派の歌人松浦辰男によって田山花袋、太田玉茗、松岡國男らと知り、獨歩とは青年文学会を通じて交りを重ねた。彼は学生時代に牛込教会で洗礼を受け、のちキリスト教界に出て牧師となり神学校を開いた。三十八年頃から再び文壇に帰ったが往年の光もなく文壇の注目をひくに至らなかった。のち憲政会総務小寺謙吉の執事となり演説の草稿の執筆などする傍らキリスト教関係の翻訳や著述に精進していたが、晩年には原始基督教に傾いて狂信的になった。大正十一年八月九日訪客を送り出した廊下で卒倒、遂に不歸の客となり、起伏の多い五十九年の生涯を閉じた。

彼には「湖處子詩集」「抒情詩」などに、ワーズワース等西欧詩の感触を伝える清純な田園情調をうたい浪漫的抒情詩の先駆者の役割を果たした。小説においても、硯友社文学全盛期に「帰省」をものし、平凡素朴な

自然と人生を平明に描き出して「文学界」同人とともに前期浪漫主義思潮の形成にあづかつて力があつた。

東海散士柴四郎は嘉永五年十二月二日安房国周准郡富津の会津陣屋に生まれた。父由道は馬術と鉄砲の師範役、母は日野氏、祖母は和歌に秀でた婦人であつた。生来多病であつた彼は他の兄弟達のように幕末多事の際に活躍しなかつたが、会津藩の降伏後は亡藩者として東西に飄零した。

明治十年の西南の役に出征して谷將軍の知遇をえ、凱旋後戦史編纂御用掛を命ぜられた。また岩崎家に入りますようになり、同家の援助をうけて米國に留学、ハーバート、ペンシルヴァニア両大学に学び明治十八年に帰国した。同年農商務大臣谷干城の秘書となり随行して歐洲視察に赴いた。海外の情勢を視て国家主義意識を強めて帰国した谷干城が政府の欧化万能主義に憤慨して内閣を去るや散士も行動を共にし興津の清見寺に寓居して読書執筆に専念した。元來國を憂えて政治家を志し、雜誌記者となり、農園を開き明治二十五年代議士に当選、その後國會に籍を置き大正四年大隈内閣の外務参政官を最後に政治的生活を終り、以後悠々自適の生活を送って大正十一年九月七十一歳の生涯を閉じた。

論説記者として出発した彼は、ときの欧化風潮に抗して憂國の熱情を披瀝し、國民の自覺を促がす幾多の論文を発表したが「佳人之奇遇」はその思想をそのまま作品化したものである。五大洲を舞台とする雄大な構想と背後に脈うつ作者の憂國の熱誠は、当時の青年層に多大の感銘を与え、政治小説に新たな分野を開拓し初期政治小説の代表的傑作とみなされている。その他に政治小説としては「東洋之佳人」、伝記小説「羽川六郎」を

始めとして、新聞や雑誌に掲げた多くの論説、「河野磐州伝」「埃及近世史」などがある。

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであらう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歲月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従つて死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名

と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げることとする。

五、年表の末尾に追込んだ分は氏名のみが引用されている場合が多い。資料の価値は研究の分野、方向又は時代によって移動するものであるから、できるだけ取捨をさける方針にしたが、紙面の都合で割愛の止むなき場合がないともかぎらない。

六、各稿の末尾に「採訪」と「文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表すると同時に、資料の出所、起稿や修訂に当って参考して文献書目を記して、その依拠を明らかにした。ために研究資料の所在表示を旨とする「資料年表」と一部重複することがある。なお採訪した人の記名は年齢（推定）順、文献の記載も発表年次順にした。

七、引用文はすべて原文に従い、外国文の場合は訳文を添付するが、通読に便するため時に大意を用いることもある。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記入し、又、異本を示す場合も同様（イ）と記入する。

八、外国の国名、地名、人名は片仮名を原則とし、倫敦、桑港のように慣用久しいものでも、逐次片仮名に改めるつもりである。但し、すでに日本語化しているものはこの限りでない。

九、邦人氏名は旧漢字を用い見出しに振りがなをつけ、外人名の初出は原語を付し以下片仮名を用いる。

一〇、年代は日本年号と西暦とを適宜織りまぜて、どちらかでも検索できるようにした。年齢は満年齢を採用したが、場合によっては数え年何歳としるすこともある。

（昭和女子大学編集室）

饗^{あえ}

庭^は

簞^こ
_う

村^{そん}

大安
正政
十一
年年
(一
九八
二五
二)
六八
月
二十
五日
校生